

第31回新人シナリオコンクール応募作品

青空は、はるかに高く、そして遠い

Parade556

登場人物表

興梶安 (18) (7) 女子高生 youtuber

峰岸真緑 (18) 安の同級生

小堀純 (18) 安の同級生

尾関綾乃 (38) (28)

安の事務所の社長 (元芸人)

興梶好子 (49) 安の母親

興梶耕一 (51) 安の父親

飯山美月 (13) 中学生

その他、安の同級生や太田母斑の女性2名など

○空

抜けるような青い空。

○柏陽高校・全景

正門に掲げられた横断幕【柏陽高校文化祭】。多くの人たちが行きかっている。

○同・女子トイレ、洗面所

興梶安（18）、制服姿（腕に文化祭実行委員会の腕章）で鏡の前に立っている。

安「よし。今日もみんなの青空になるぞ」

安、満面の笑顔になり、下ろしていた髪を両手でまとめて後ろで結ぼうとする。右頬から右目にかけて広がる青いアザ（太田母斑）が現れる。

安、自分のアザを見る。笑顔が固まる。安の鼓動。その鼓動に重なるたくさんの人の足音と若い女性たちの声。

○同・中庭の特設ステージ前にある広場

どんだん観客が集まってくる。多くは、安と同じ制服を着た女子生徒たち。みんな、スマホを持っている。

女子A 「安、まだかよお」

女子B 「あーん。早くう」

隣の女子グループ。

女子C 「安。アイツ、マジうけるよね」

女子D 「最強の陽キャっしょ」

女子E 「アイツの顔見るだけで元気になる」

3人、顔を見合わせて、

女子C・D・E 「うちの青空」

女子CとE、お互いの顔を見てうなずき合う。

女子たち、喋りながらスマホにフリック入力している。

○女子たちのスマホ画面

どの画面もインスタやTwitter。ステージ上の写真や安の写真がUPさ

れていく。

安の写真はどれも満面の笑顔。

○高校・トイレの洗面所

洗面所に置いてある安のスマホ。続々と通知画面が出る。

安、髪の毛を持つ手が震えている。

安、スマホを見る。次から次へと仲間からの通知。

安の鼓動、テンポが速くなっていく。

真緑の声「おせえよ。安」

安「ちよつと待って」

○同・トイレの前の廊下

峰岸真緑（18）壁にもたれて立っている。真緑も安と同じ服装、同じ腕章をしている。

真緑「あれ、もしかしてビビッてんのか？」

安の声「んなわけあるかッ。みんなの青空がビビるわけないっしょ」

真緑「出た。青空」

○同・トイレの洗面所

スマホに続々と通知。

安の耳の奥で、あちこちから安を呼ぶ声が重なる。

鼓動が全速力で走ったあとのように高鳴っている。

女子生徒たちの声「安、安、安」

安の目に怯え。やにわにスマホを裏返す。手を離れた拍子に、ぱらっと髪の毛がおりてアザが隠れる。

安、アザの隠れた顔を見る。すると、耳奥でなっていた仲間達の声が消え、鼓動が落ち着いていく。

安、鏡に映る自分の顔を見つめる。そこには、自信のないひとりの少女が。

安の声「アンタのどこが青空なの」

笑顔の消えた顔で、見つめている。

安の声「ただの汚いアザじゃん。それ」

○同・特設ステージ前の広場

観客で、隙間がないくらいギッシリ。

○同・トイレの前の廊下

小堀純（18）廊下の角を曲がって走ってくる。小堀も安、真緑と同じ腕章。

小堀、トイレの前に立つ真緑を見つけると立ち止まり、息を切らしながら、

小堀「あ、安は？」

真緑、何も言わずトイレを指さす。

小堀「早くしないと、もうステージはじまつ

ちゃうよ」

真緑「入って呼んでこいよ」

小堀「いや、無理だよ無理無理」

真緑、ケラケラと笑う。

○同・トイレの洗面所

安、鏡を見ている。

○同・特設ステージ前の広場

観客から安のコールがはじまる。

観客「あーん。あーん」

○同・トイレ前の廊下

真緑「ああ。めんどくせえなあ。安、早くしろって」

真緑、トイレの中に入っていく。

○同・トイレの洗面所

真緑、入ってくる。

安、髪の毛を後ろで縛っている。

真緑「おい。早くしろっての」

安「絶賛、準備中」

安の露わになっている頬。

真緑「頼むぜ。みんな待ってんだからよ」

安「まかしとけ。マジ、青空なめんな」

真緑、笑いながら安を見る。

安、鏡に向かって満面の笑顔を見せ、

安「よーし。今日もみんなの青空になるぞお」

○同・特設ステージの上

安「はい。お待たせしましたあ」

安がマイクを持ってステージに出てくると、歓声が沸く。

女子生徒たちが安にスマホのカメラを向ける。

舞台袖から見ている真緑と小堀。

安「みんな、お待たせ」

○安の視点（ステージ上から観客を見る）

安、観客たちの表情に視線を走らせる。

みんな、安のことをスマホ越しに笑顔で見つめている。カメラのレンズが陽光をあびてキラキラと光る。

安、視線を走らせる。どこを見ても、

安を見る笑顔、笑顔、笑顔、笑顔。

安の高まっていく鼓動。

中庭の奥で、醒めた目で見ている二人の女子生徒たちがいる。

安の視線が止まる。

安の鼓動がはじけるような大きな音をあげる。

真緑の声「安、安」

○高校・ステージ上

真緑、舞台袖からステージのセンター方向を指さす。

真緑「そこじゃねえだろ立ち位置」

安「あ、そうだった」

観客の笑い声。

少女A「安、しっかりい」

安、照れて舌を出す。

少女B「あーん」

少女C「うちの青空あ」

安「はい。柏陽高校の伝統企画、文化祭ダンスコーナードーす。司会を務めます柏陽高校一の陽キャこと、青空の安でーす」

観客の歓声。あちこちから「安」や

「青空」の叫び声が。

○同・中庭

尾関綾乃（38）が現れる。（綾乃は太っている）

綾乃、サングラス越しに観客を見ている。みんな楽しそうに安の名前を呼んでいる。

綾乃、ステージ上の安を見る。

○同・ステージ上

安「今日も青空だよ。最高。で、青空っていうのは（指で天をさして）あれじゃないよ。コレ（自分の頬を指さす）のことを青空って呼んでます」

観客、安の名前を呼ぶ。

安「初めて、コレを観た人もいるかもしれないので説明すると、生まれつきくっついてきちちゃった感じですよ」

安は決して、うしろめたさも暗さもなく、あっけらかんとしている。

安「正式名称は、太田母斑。でもめんどくさ

いから青空って呼んでます。見て見て、けっこう良い色でしょ？」

観客、笑いながら安の名を呼ぶ。

安「空は、雨も曇りも雷もあるけど、ここはいつでも青い空なんで」

安、ひとつ息を大きく吸い込むと満面の笑みを浮かべ、

安「私は、みんなをいつも元気に明るく照らす青空になりたいです」

安が観客に手を振ると、観客も降り返してくる。

安「とにかくみんな、今日はよろしくねえ」

○同・中庭

綾乃、ステージ上の安を見ている。

傍に2人の女生徒がくる。

女子A「あ、アザの人だ」

女子B「マジ、何が青空だよ」

女子A「それな」

女子B「ちよっと頭おかしいっしょ。アレ」

女子A「激しく同意」

女子AとB、その場から去っていく。

安、ステージ上でダンスを終えた生徒たちと話している。

安の顔にあるアザは目立つ。でもまるでそこにアザなどないかのように、明るく振る舞っている。

安の笑い声に、みんなも笑う。安が笑顔になると、観客たちも笑顔になる。サングラス越しの綾乃の目、安に魅入っている。

○同（夕方）

観客の姿は消え、ステージの撤収がはじまっている。

安、真緑、小堀の周りにたくさん生徒たち（ほとんど女生徒）

女生徒A「安、最高だった。ハグハグう」

安に抱きつく女子A。

安「ぐええ。キモいキモい」

女生徒B「ハグハグう」

安に次々と抱き着いていく女生徒たち。

安「うええ。離れろ、離れろお」

安の周りにある笑顔、笑顔、笑顔。

真緑、嫌がる小堀の肩を抱いて、

真緑「うちらも褒めろ」

女生徒C「(安に抱き着きながら)うん。す

ごいすごい」

真緑「雑すぎだろ。(小堀を見て)オマエも

なんか言え」

小堀「やっぱ安だよ」

真緑「なんだそれ」

女生徒たちが笑う。

綾乃の声「お楽しみのところごめんなさいね」

綾乃、安たちの前に立つとサングラス
を外す。

安も含め、全員があっとなる。

小堀「うわ。ゴージャス綾乃だッ」

生徒A「うわ、すご。本物じゃん」

生徒B「なんかネタやっつてネタ」

安、綾乃を目を丸くして見る。

安の泣く声（次シーン、幼少期の安）

○（回想）安の家の近くの通り

T・「10年前」

興梠安（ㇿ）ランドセルを背負い、顔を隠して泣きながら歩いている。

髪は下ろしており、頬には太田母斑。

後ろから同年代の男児二人が追いかけてくる。

男児A 「やーい。お岩さーん」

男児B 「気持ち悪いんだよ。バーカ」

男児、石を投げてくる。

安、家の中に逃げ込む。

○（回想）安・自宅のリビング

安、テレビを見ている。

バラエティー番組。

尾関綾乃（28）ボディコン衣装でポーズをとる。太っていて、ぴちぴち。

でも綾乃は、自信に満ち溢れている。

綾乃「はい。世界で一番デートの予約がとれない女」

綾乃、ポージングを決め、

綾乃「世界最強のボディで世界中の男子を虜にする女、ゴージャス綾乃です」

観客の嗤い声。観客から「デブ」「豚」
などとからかわれる。

綾乃、まっすぐ前を向いている。何も恐れていない目。悪口を言われる度に、ぐいぐいとステージの前の方に出ている。

安、そんな綾乃を見ている。その顔に
もう涙はない。

○元の中庭（夕方）

安、綾乃を見ている。

綾乃「ありがとう。でも、もう辞めたの芸人は。て言うか芸能界」

真緑「今、youtubeの事務所はじめたんです

よね？」

綾乃「そう。まだ所属 youtuber 誰もいないけどね」

綾乃、安を見る。

安、驚いて目を見開く。

綾乃「で、安さん。あなたをスカウトしてきました」

一瞬の間があいた後、安以外、歓喜の声をあげると、スマホが安に向く。シッター音とフリック入力。

安の握った拳がかすかに震えている。

真緑、その手に気づく。

○同級生たちのスマホ画面（夕方）

安がスカウトされたというニュースが駆け巡る。

【安、スカウトされたあ】

【安、youtuber デビューきたあ】
など。

○高校・中庭（夕方）

小堀「やります」

綾乃「あなたじゃないんだけど」

小堀「ね？安。やるよね」

安の周りに仲間達が集まってくる。

女子A「安、やりなよ」

女子B「安、絶対むいてるって」

小堀「安、うちらだけじゃなくて、もつとた

くさんの人の青空になってよ」

綾乃、安を見る。

綾乃「あなたなら、絶対にうまくいく」

安、周りにいくら促されてもうつぶむいたまま。

真緑、安の横顔を見ている。

安の姿を映す同級生たちのスマホ。

安の拳の震えが止まる。安、ぱつと顔をあげると満面の笑顔で、

安「もち。やります」

綾乃「よっしゃ」

綾乃の返しにみんなが笑う。

小堀「やったあ。安が youtuber デビューだ」
小堀をはじめ、仲間達は自分のことのように飛び上がって喜んでいる。
真緑だけ冷静に、安の笑顔を見ている。

○通り（夜）

真緑と小堀が歩いている。

小堀「ほら、ぼくの言った通りじゃん」

真緑「…」

小堀「安には、タレントの才能があるって言うってたよね。ずっと」

真緑「…大丈夫か。アイツ」

小堀「え？誰のこと」

真緑「安しかいねえだろ。ボケっ」

真緑、小堀にローキック。

小堀「いたっ。なんでいつも人を殴るんだよ」

真緑「殴ってない。蹴った」

小堀「そういうところ、ほんと直した方がいいよ」

真緑、蹴りを繰り返そうと足を引く。

小堀、飛びのいて避ける。

真緑、足を元に戻して俯く。

小堀、笑顔になり、

小堀「安なら大丈夫」

真緑「その根拠は？」

小堀「安は無敵じゃないか」

小堀、満面の笑顔。

真緑「何言ってるんだオマエ」

小堀「安は強い」

真緑「は？」

小堀「安は強い」

真緑「は？」

小堀「安は強いでしょッ。最強」

真緑「は？」

小堀「は？ってやめろよ。よくないぞ。そう

いうとこ」

真緑、小堀を睨んでいる。

小堀、距離をとり立ち止まる。何か言

いたそうにモジモジモジモジ。

真緑「なんだよ。言えよ」

小堀「怒るからヤダ」

真緑「言え」

小堀「言わない」

真緑「言わないとキレる。キレちらかす」

小堀「どっちだってキレるもん。どうせ」

真緑「二万回、蹴る」

小堀、自分の口を両手で塞ぐ。

真緑「左右で四万回な」

小堀「やめろよ。女の子だろ」

真緑「だからあ、早く言えっつての」

小堀「怒らない？」

真緑「いいから言え」

真緑、小堀を蹴る。

小堀「あ、いた」

真緑「今のは一発目にカウントしねえから」

真緑、足を振り上げる。

小堀「わかった、わかったから待って。待つ

て」

真緑、小堀を見つめる。

小堀「…真緑は、安に嫉妬してるだけなんだ

よ

街の音。

真緑、呆れて、

真緑「消えてなくなれ」

小堀「なんでいつも、人を傷つけるようなこ

とばつか言うんだよ」

真緑「何もわかってねえなオマエは」

小堀「わかってるよ。真緑よりは」

真緑、溜息。

小堀「すぐ溜息つくなよ。ムカつくなあ」

真緑「気づかねえのかよ？いつも」

○（回想）高校・広場（文化祭中）

安に好意的ではない視線を向ける人達。

真緑の声「安を見てる奴らの目」

○元の通り（夜）

小堀「え？みんな、安のこと大好きだよね」

真緑「もう、いいや」

小堀「あ、コンビニだ。お腹すかない？」

真緑「…」

小堀「唐揚げクン買おうよ。唐揚げクン。あ、
20パー増量キャンペーンだつてき。真緑、
早く早く」

小堀、嬉しそうに店内へ走っていく。

真緑、溜息をつくも、唐揚げの横断幕
を見て腹が鳴る。

○電車の中（夜）

安、窓に映る顔を見ている。

停まっていた電車が動き出す。

安、後ろで結んでいた髪の毛を下ろす。

安の声「私はいつも、この駅をすぎると髪を
下ろす」

だんだん加速していく電車。

安の声「この駅の先には、同級生は誰も住ん
でないから」

安、笑顔なく、窓に映る髪で自分の顔
を見ている。

安の声「youtuber？アンタ本気でやるの？

そんなでつかいアザ、顔につけたままで」

安、自分の顔を睨む。

安の声「アンタの心は、ほんとはいっつも曇ってるじゃん。自分の青空にもなれないのに……」

安が持っているスマホがバイブレーション

ヨン。画面に通知。【#青空の安】で

投稿された Twitter。

安、自然と笑顔になり返信を打ち込みはじめる。でも目は笑っていない。どこか苦しそう。

○安のスマホ画面（夜）

Twitter のリプライにアンチコメ。

男の声【気持ち悪い】

○電車の中（夜）

安、笑顔が固まり、鼓動が一気に高鳴る。

○(回想) 通り

安(「」)、泣きながら歩いている。

男児の声「気持ち悪い。気持ち悪い」

男児のはやし立てる声。

○(回想) 自宅・リビング

安、テレビに映る綾乃(28)を見ている。

野次を飛ばされても、自信満々の綾乃。

彫刻のようにその表情が揺るがない。

安、憧れの眼差しで綾乃を見ている。

安、自然と自分のアザに手で触れている。

○元の電車の中(夜)

安、無理矢理笑顔になり、返信を打ち込む。

安の声「キモいよね。キモくても、みんなを笑顔にしたいです」

仲間たちのリプライ。アンチコメント

の上に、次々と覆いかぶさっていく。

女子Aの声「安はキモくねえし」

女子Bの声「おめえの方がキモいわ」

安の声「みんな。あんまり言わないであげて」

女子Aの声「安、おまえ良い人すぎ」

女子Bの声「アンチは叩かないとダメっしょ」

アンチコメントが投稿者によって削除される。

女子たちが歓喜の声をあげる。

好子の声「それで、もう決めてきちやったわけ？」

○安の家・ダイニングルーム（夜）

興梠好子（49）、安に詰め寄っている。隣に座る興梠耕一（51）はタブレットを見ていて無関心。タブレットには反射ミラーが貼られていて、何を見ているのかはわからない。

安、二人の向かいに座っている。

安「…やってみようかなって」

安、スマホを見る。

○安のスマホ画面（夜）

クラスメイトとのグループLINE。

女子Aの声「安なら絶対いけるって」

女子Bの声「登録者20万とか余裕っしょ」

女子Cの声「うちらも全力応援な」

女子Dの声「日本中の青空になって。安」

クラスメイトの熱量とは反比例して、

安の声は弱い。

安の声「みんなも応援してくれてるし」

好子の声「みんなって誰よ」

○安の家・ダイニングルーム（夜）

安、スマホの画面を見ながら、

安「…クラスのみんな」

好子「バカも休み休み言いなさい。赤の他人

じゃないの」

安「他人じゃない。大事な仲間だし」

好子「家族より大事な仲間があるもんですか」

安、ずっとスマホを見ている。

好子「母さんと大事な話してる時にスマホなんか見ないで」

安、スマホから顔をあげる。

好子「スマホ置きなさい。アンタ中毒よ。それ」

安、渋々テーブルの上にスマホを置く。

好子「とにかく、母さんは反対だから」

好子、テーブルの上に置いてある契約書を持ち上げ、

好子「保護者の同意がないと契約できないのよ」

安「やるから」

好子「母さんはサインしない」

安「なんで、いつも邪魔ばっかすんの？」

好子「アンタのために言ってるの」

安「違うよ。いつも自分のためじゃん」

○安のスマホ画面（夜）

ある同級生のコメントと全く同じこと

を、安が喋る。

安の声「もつとたくさんの人を笑顔にできる」

○安の家・ダイニングルーム（夜）

好子「バカッ」

安「何でいつも否定するの」

好子「あなたねえ、何度言ったらわかるの？」

安「何を？」

好子、手を自分の頬に当てて、

好子「アンタ、普通じゃないのよ」

安「フツウだし」

好子「どこが普通なの？その顔。そのアザ、

誰がどう見ても普通じゃないでしょうが」

安「コレがあるから、私は私でいられるの」

安、愛おしそうにアザをなでる。

好子「youtubeやるなら、手術してからにして」

戸棚に並ぶカタログ（太田母斑の治療が得意な病院）。カタログの多くは擦り切れている。

安「手術はしない。何度言ったらわかってくれるの」

好子「ほんとにバカね。アンタは」

安「みんなも、この顔を受け入れてくれてるから」

好子「バカね。そんなの高校の間だけよ」

安「うちらは一生の友達だから」

好子「バカ。そんなことあるわけないでしょ。

アンタ、これから就職もして結婚もしない

といけないのよ。ハンデなの。アザがある

ってことは」

安「ハンデなんかじゃない」

好子「ハンデよ。マイナスよ。それ」

安「プラスだよ。絶対」

好子「お父さんもなんか言ってく下さいよ」

耕一「んんっ？」

好子「あーぎ。アザのこと」

耕一「…ああ、うん」

好子、安の顔を指さして、

好子「電化製品なら不良品ですよ。こんなの」

耕一、タブレットを操作している。

好子「ちよっとお父さんッ。聞いてるんですか？」

好子、耕一の肩をバシバシ叩く。

耕一、されるがまま。

好子「どうして、誰も私の気持ちをわかってくれないの？いつも家族のために頑張ってるのに」

安も耕一も答えない。

好子「もうほんと。いっつも私ばかり貧乏籤。最低最悪な家族よ」

好子、安のアザを指さして、

好子「全部、そのアザのせいよ。アンタがちやんと私の言うこと聞いて治療してたら、こんなおかしな家族になってなかった」

安「治療なんかしない」

安、毛色ばんで立ちあがる。好子も立ちあがる。

耕一、タブレットを見ながら、

耕一「…いいじゃないか。安の人生だろ」

安「父さん」

安、ホツとした顔で耕一を見る。

好子「二人で悪者にしてッ」

好子、目に大粒の涙をためて部屋を飛び出していく。

○同・安の部屋（夜）

安、ベッドに横になりながら、スマホを操作。LINEの返信。

好子、いきなりドア開けて、

好子「母さんは、ぜーったいに反対だから」

安、好子の方を見ない。

好子「このままyoutubeなんかやったら、全

世界にそのアザをさらることになるんだからね。そっから手術したってもう遅いのよ」

好子、ドアを力任せに閉めて出ていく。

安、部屋の窓ガラスに映る自分の顔を見る。汚いものを触るようにアザに手を触れながら、

安の声「私だって嫌だよ。こんなの付けたま

まで、やりたくなんかないよ」

○安のスマホ画面（夜）

どンドンLINEに仲間からの応援コメントが届く。

安の声「でもみんながやってっ言うから…
いやだけど、やるしかないんだ」

○安の自宅・安の部屋（夜）

安の部屋の中には鏡がない。

安、疲れた顔で窓ガラスに映る自分の顔を見る。自分の頬にあるアザを指先で触れる。

安の声「みんなの前では、いつも笑顔でいなきや。陽キヤの、青空の安でいなくちや」

安、スマホを放り投げて枕に顔をうずめる。

安の声「こんな自分が嫌い。ほんと、大嫌い」

安、爪をたててアザをひっかく。ひっかいてひっかいてひっかいても取れない

い。

LINE電話。

安、スマホに飛びつく。画面に同年代の女子の顔。

安、慌てて髪を後ろで縛ると電話に出る。満面の笑顔をつくって。

安「お。京子。どうしたん？」

女子生徒の声「あーん。マジ泣きそう」

安「どうしたどうした」

女子生徒の声「お悩み相談してえ」

安「よっしゃ。いっちゃやったるわい」

安、笑顔になる。

○高校・あちこちの壁

小堀や真緑、女子生徒たちが安のポスターを貼っていく。

【青空の安 youtube デビュー】

○同・教員室の中

小堀と真緑、入っていく。

小堀・真緑「失礼します」

二人を見つけると集まってくる教師達。
小堀の広げたポスターを見て歓喜の声をあげる教師たち。

○同・校長室の外の廊下

【校長室】のプレートが貼られている。

○同・室内

壁一面に安のポスターが貼ってある。

○駅の改札（朝）

T・「日曜日（初配信の日）」

安（私服姿）、出てくる。髪の毛を後ろで縛っている。

小堀「おはよう安」

私服姿の小堀と真緑が待っている。

安「おは」

小堀「さあ、行こう」

小堀、ゴーカムを持って先頭に立って

歩きだす。

安、真緑、小堀に付いて歩きはじめる。

安「何、それ」

小堀「ライブ中継中。クラスのみんな見てるよ」

安「ええ！おは。みんな」

○小堀のスマホ（朝）

同級達がどんどんコメントを打ち込んで行く。

○別の通り（朝）

安とすれ違う人達。スマホを見ながら歩いている人が多い。安に気づいて、アザを見つけると、皆少し驚いた顔をしてから目を背ける。

小学生高学年くらいの男児3名とすれ違う。全員学習塾のバックパックを背負っている。3人、顔を見合わせてから安を追いかけていき、安の進路を塞

ぐと、男児Aがアザを指さして、

男児A 「殴られたの？それ」

男児B 「すげえアザじゃん」

男児C 「ボクサーなんじゃね？」

安、とたんに笑顔を浮かべ、

安 「そう。お姉ちゃん、ボクサーなんだ」

安、パンチを振る真似。腰の効いた右フックが空を切る。男児たち、嬉しそうに手をたたく。

小堀、笑いながら見ている。

真緑、気遣うような視線を送る。

子供たち、笑いながら走りさっていく。

安、手を振る。

路地の手前で先ほどの子供達が手を振り、角を曲がる。

安、手を下ろすと振り返り歩きだす。

先程の子供のひとりがひよっこり顔だけ出すと、

男児A 「ばけものお」

安、驚いた顔。でも途端にいつもの笑

顔になり、両手を振り上げて怪獣の真似で振り返る。

安「ぎやおおお」

もうそこに子供の姿はない。

安の後ろ姿。

安、ゆっくりと腕を下ろす。

小堀「子供ってかわいいなあ」

真緑、安の背中を見る。

安、振り返ってゴーカムに向かってピ

ースサイン。

○小堀のスマホ（朝）

【安、最強】などのコメントが並ぶ。

安、ゴーカムに向かってガッツポーズ。

○事務所が入っている雑居ビルの前（朝）

真緑と小堀、立ち止まる。

安、振り返り、

安「じゃあ、行ってくるわ」

真緑「おう。かましてこい」

小堀「いってらっしゃーい」

○同・エントランス（朝）

安、入っていく。

どんだん高鳴っていく鼓動。

好子の声「アンタ。全世界にそのアザをさらることになるよ」

先程の子供の声「ばけものお」

○同・エレベーターの中（朝）

安、エレベーターに入り、ドアが閉まる直前まで笑顔で手を振っている。

ドアが閉まった瞬間、その場にへなへなど座り込んでしまう。

ぐんぐんと上がっていくエレベーター。

安、胸をおさえてうずくまっている。

ガンガン高鳴っていく鼓動。

○同・エレベーターホールの前（朝）

綾乃、立っている。

エレベーターが開く。

安、エレベーターの端に体育座り。

綾乃「元芸人なめんな。面白くないわ」

安「なんか疲れちゃって」

綾乃「ばばあか」

安「花の18歳です」

綾乃、エレベーターのドアに手をかけて開きながら、

綾乃「早く立っておばあちゃん」

安「はーい」

○同・事務所（朝）

綾乃、スタジオのドアを開ける。

事務机や書類棚の反対側に、撮影機材がセットされている。

安「あれ？」

綾乃「何？」

安「スタッフさんなどは？」

綾乃「いねえし。アタシだけだし」

安「ありや」

綾乃「とりあえずうちらで稼いで、六本木の
ビルに引っ越すよ」

安「はい」

綾乃「メイクは洗面所ね」

安「はい」

○同・洗面所（朝）

安、メイク中。

マスカラをしている安の手が止まる。

小刻みな震え。それがだんだん大きくな
っていく。

安、床に座り込んでしまう。体が冷水
をかけられたように震えている。

綾乃、洗面所に入ってくる。

綾乃「どうした？安、安」

安、笑いながら振り返る。

安「えへへ。すいません」

綾乃「あんた」

綾乃、安を抱き寄せる。

綾乃「大丈夫、大丈夫だからね」

○（回想）テレビ局のトイレ・個室

綾乃（28）ボディコン衣装のまま。

体が震えている。

綾乃を揶揄する言葉の群れが耳の奥で

鳴り響いている。

綾乃の声「大丈夫、大丈夫だから」

○元の洗面所（朝）

綾乃、安を抱き寄せる。

安の震えはおさまらない。

綾乃「…うん。やめよっか？今日」

安「…」

綾乃「無理しないでいいよ」

安、綾乃の腕の中で目を開ける。

○フラッシュバック

真緑や小堀、同級生たちの顔。

そしてテレビに映る綾乃の堂々とした

姿。

○元の洗面所（朝）

安、顔をあげる。

安「やります」

そこに笑顔はない。同時に恐れもない。
何かを決意したような顔をしている。

安「もう、大丈夫」

綾乃「実は暑苦しい？」

安「いえいえ全然」

綾乃「ほんとか？」

安「へい。ひよってすいませんでした」

綾乃、安を離すと立ち上がり、

綾乃「わかった。じゃあ、自分のタイミング

でいいから、出てきて」

安「はい」

綾乃「うん」

綾乃、部屋を出ていく。

安、ゆっくりと立ち上がると鏡を見る。

綾乃の声「はい。やってみて」

○同・事務所内の撮影スペース

安、不審そうに綾乃を見る。

綾乃「掴みが大事なのよ」

安「なんかださい」

綾乃「どこが？もう1回見せるから」

綾乃、うつむく。

綾乃「（自分の頭を両手でぽかぽかと叩く真似をしながら顔をあげ）ポジ、ポジ、ポジ、ポジ、ポジ、ポジ、ポジ、ポジ、みんなの友達、（左の頬を指さし）青空こと、青空の安でーす
…どう？よくない？」

綾乃、太っているので息切れ。

安「…」

綾乃「やれ」

安「いや」

見つめあう二人。綾乃、唐突に安の腹に突きを打ち込む。

綾乃「ちえすとおー」

安「うげえ」

安、まともに受ける。

○高校・校庭

サッカーの試合が行われている。

○同・職員室前の廊下

安のポスターがいくつも貼られている。
その前を、野球やテニス、バスケなど
様々なユニフォームを着た学生たちが
行きかっている。

○you tubeのライブ配信画面

安、激辛ラーメンを食べて悶絶してい
る。
コメント欄に、同級生とのコメントが
次から次へと投稿されていく。
安を応援するコメント。

○事務所の近くのファミレス・店内

真緑と小堀、ボックス席に座ってスマ
ホを見ている。
画面には、安の配信が映っている。

真緑と小堀、口もきかずどんどんコメントを打ち込んでいく。

○高校・職員室前の廊下

その前を通るチアリーダー姿の女子生徒二人。安のポスターを見る。

女子A「チャンネル登録しなよ」

女子B「えーやだよ」

女子A「なんで？学園の人気モンじゃん」

女子B「シンプルにキモい。青空って、マジきしよくない？」

ジャージ姿の中年男性（教師）が歩いてきたので口をつぐむ。

男性教師「すごいなあ安は。すさまじいバイタリテイだよ。オマエらも見習わないとダメだぞ」

女子A「はあ」

男性教師「なんだその返事。覇気がないなあ。チャンネル登録したか？俺はもうしたぞ」
女子A「しました」

男性教師「おお、それだけでも偉い偉い。動画見て、ちよつとでもいいから安に近づいてみる」

教師、教員室の中に入っていく。

女子B「え？登録したの」

女子A「誰がッ。ふざけんな」

○you tubeの画面

LIVE コメントの中に、【リアルお岩

さんじゃん】というコメントが混じる。

返信がどんどんぶら下がる。

女子Aの声「安の悪口言うな」

女子Bの声「ぶっ殺すぞ。オマエ」

同級生達のアンチコメに反論するコメ

ントがつづく。

○事務所

男の声「リアルお岩さんじゃん」

安の固まったままの笑顔。

綾乃、手を叩いて近づいてきて、

綾乃「はい。お疲れ。上出来上出来」

安、瞬きもしないでモニターを見ている。モニターはもう暗くなっている。

綾乃、安の前までくると両手を振って、

綾乃「あれ？安、あーん？」

安「あ？すみません。はい」

綾乃「何？絶賛気絶中？」

安「いや。ぜんぜん」

綾乃「ならいいけど。うん。合格」

安「ありがとうございます」

綾乃「初日にしちゃよくやったよ」

安「ちな、何点ですか？」

綾乃「42点」

安「赤点じゃん」

綾乃「ギリ、セーフじゃない？」

安と綾乃、顔を見合わせて笑う。

綾乃、スマホを見ながら、

綾乃「おお。コメント来てるね」

綾乃、youtubeのコメント欄をスクロ

ールしていく。目を輝かせて、

綾乃「いいじゃん。これ。ほら」

綾乃、スマホの画面を安に見せる。

綾乃の指さす先には【リアルお岩さん】

綾乃、安の顔を覗き込む。

安、綾乃を見つめ返して笑い返す。

綾乃「さすが。私が見込んだだけのことはある」

綾乃、安の目をしっかり見て、

綾乃「良い？私の経験上、アンチから逃げようとするほど追いかけてくる」

安「はい」

綾乃「言われたら、前、とにかく前に出るの。

言われたら前が出る。それだけは覚えておいて。言われたら前、前、前。アンタならできる」

安「牛になれと？」

綾乃「そ。赤い旗が目の前にあると思って、とにかく突進あるのみ」

○ファミレス・店内

真緑、大きく息を吐くとスマホを置く。

小堀「良かったよね。すごい良かったよね」

真緑「なんか、アイツらしかった」

小堀「そうだね。いつもの安だった」

真緑「なんか、腹減ったなあ」

机の上にはドリンクバーのカップだけ。

小堀「安、来てからにしない？」

真緑「そうだな」

○大通りにつながる路地

人込みが見える。

安、立ち止まる。

安を揶揄する言葉たちが耳の奥でこだまする。

安、自然と自分の頬に手が触れている。

安、バックパックから帽子を取り出し、

かぶるとうつむき気味に歩き出す。

スマホに真緑からLINE。

真緑の声「ジョナサンいる」

○ファミレス・店内（夕方）

真緑「オマエ、何回見てんだよ」

小堀「だって、最高じゃん」

真緑、立ちあがる。

小堀「どこ行くの？」

真緑「便所」

小堀「女の子だろ」

真緑「女の子だろお」

小堀「真似すんなよ真緑」

真緑、笑いながら歩いていく。

○同・入口（夕方）

扉の向こうで、安が帽子をとっている。

真緑、扉を開けて安の前に立つ。

安、あつとなる。

真緑「もう有名人気取りかよ」

安「ばれたか」

○同・店内（夜）

ボックス席で、楽しそうに話す安、真

緑、小堀。

安、頬を露わにしている。

○高校・廊下（朝）

安、歩いている。あちこちから声をかけられる。

女子A「あーん。昨日、見たよ」

安「おは。ありがとう」

女子B「安。チャンネル登録したかんね」

安「おは。サンクス」

○同・教室（朝）

安、教室に入ってくる。

安「あー、しんどいなあ」

仲間達、安を見つけてパツと顔を輝かせる。

あちこちから安を呼ぶ声。

安「あーもういいって」

女子C「あーん。ハグハグう」

女子D「ハグハグう」

同級生たちが集まってきて、次々と安に抱き着く。

安「ぐえええ。キモいキモい」

女子C「ていうかひどくない。昨日のアンチ」

女子D「あ、リアルお岩さんでしょ」

女子E「マジ、超バッド（親指を下に向けて）しといたから」

安、きよとん。

安「え？ていうか面白くない」

同級生たち、驚く。

安、アザを指さして、

安「だってお岩さんじゃん。リアルに」

同級生から笑顔が消える。

安「あれ？何この空気」

誰も何も言わなくなる。

安「おーい。どうしたあ君たちい」

同級生たちが感嘆の息を漏らす。

女子C「マジ。メンタル鋼」

女子D「やっぱすげえや安は」

安「次の動画、楽しみにしてて。リアルお岩

さんやる予定だから」

一転、みんな笑顔になり、また抱き着いてくる同級生たち。

女子たち「ハグハグう」

安「ぎゃああ。キモいキモい」

小堀、真緑に尻を蹴られながら入ってくる。

小堀「やめろよ、真緑。あつ、安。おはよう」

真緑、みんなに抱き着かれて笑っている安を見る。

○お化け屋敷の入口

T・「2回目の撮影」

綾乃がカメラを回している。

安、白装束を着てカメラの前に立っている。

安「はい。ということでは今日は、お化け屋敷に来ています。リアルお岩さんになって、お客さんを脅かしたいと思います」

綾乃、カメラを構えたまま、

綾乃「うん。オツケー」

安「はい」

綾乃「似合うじゃん。白装束」

安「でしょ」

綾乃「よし。じゃあ中、入ろっか。めっちゃく

ちや脅かしてやろう」

安「うん。楽しみい」

綾乃と安、お化け屋敷の中に入っていく。

○高校・教室（朝）

安が同級生たちを追いかけまわしている。

安「お岩さんだぞお」

きやあきやあ言いながら逃げている女子たち。

真緑と小堀、奥隅の席に座っている。

小堀「やっぱ、安ってすごいな」

真緑「…」

小堀「ぼくには絶対真似できないや」

真緑「…」

小堀「真緑、聞いてる？」

真緑「ああ」

真緑、安の横顔を見ている。

○安の自宅の前（夕方）

安、浮かない顔。玄関ドアを見て溜息。

中年女性の声「あら、安ちゃん」

隣の家のおばさんが顔を出している。

安「あ、どうも。こんばんは」

おばさん「youtube見てるわよ」

安「ありがとう」

おばさん「なんかごめんね」

安「え？何が？」

おばさん「ほら。おばちゃん、ずっとアザの

治療しな治療しなって言ってたでしょ」

安「…」

おばさん「安ちゃん。全然気にしてなかった

んだね。ごめんね」

おばさん、家の中に入っていく。

安、ぼつん。

安「…気にしてるし」

安、震えている自分の掌を見つめる。

男の声「キモいんだよ」

安、振り返る。通りには誰もいない。

安、家に駆けこんでいく。

○安の自宅・ダイニングルーム（夜）

好子「だから言ったの。母さんやめなさいって。どうせ、アンタなんか誰も興味ないんだから」

耕一、タブレットを見ている。

耕一「…まだはじめて2週間だろ」

好子「全然ダメよ。何人？フオロワー」

安「2000人くらい」

好子「すごい人は100万人とかいるのよ」

耕一「そりゃ、何年もやってる奴だろ」

好子「何年もやらせませんから。こんなこと。

恥ずかしいったらない」

好子、部屋を出ていきながら、

好子「あー、はずかしいはずかしい」

安と耕一だけが残る。

耕一「ほんと、バカな女だよ」

安「…」

耕一「面白いか？仕事」

安「うん。みんなが助けてくれる」

耕一「それはな、安の人徳だよ」

○同・安の部屋（夜）

安、窓ガラスに映る自分の顔を見ている。

耕一の声「安の人徳だよ」

好子、いきなり部屋のドアを開けると、

好子「一生、ネットにアザの動画が残るんだからね」

安、振り返って好子を睨む。

安「いきなり開けないですよ。何度言ったら…」

好子「（遮って）今から、治療したって無駄なんだからね。もうアンタは、一生、フツウにはなれないの」

好子、力任せにドアを締めて出ていく。

安「うるさいな。出てっつてよ」

ドアの外から好子の声。

好子の声「母さんの言うこときかないからこんなことになるの。自業自得よ」

好子、どたどたと足音を立てて階段をおりていく。

安、力任せにカーテンを閉じると、ベツドの上に倒れ込む。

スマホが鳴る。LINE通知。

安、動かない。ぐっと布団を掴む手。やにわに動きだしてスマホを取る。

返信を打ち込むとき、笑顔になっている。でも決して、幸せそうな笑顔ではない。泣き笑いのような顔。

○高校・教室

チャイムが鳴る。時計は15時。

安、慌てて教室を出ていく。

安「撮影いつてきまーす」

クラスメイトたち、あちこちから、い
ってらっしゃいの声。

○同・廊下

安、駆け出していく。

あちこちから声をかけられる。

生徒、教師、用務員。

安はみんなの人気者である。

綾乃の声「安、悪い。新人の面接があるから、
先に事務所行って」

○事務所の入っている雑居ビルの前の通り

(夕方)

3人の女性が距離をあけて立っている。

みんな帽子を目深にかぶりスマホの画

面を見ている。

安、駆け込んでくる。

安「えーと、今日の撮影の方ですよね」

全員、安の顔を見る。

安、笑顔になり、

安「どうぞ。こちらです」

3人、何も言わずに安についていく。

○同・エレベーターの中（夕方）

安と3人の女性、微妙に距離を開けて
いる。

安「ありがとうございます。今日は来ていた
だいて」

安の明るい感じが全く通じない。

○同・事務所（夜）

安と3人、微妙な距離を開けて座って
いる。

綾乃、入ってくる。

綾乃「すみません。遅くなっちゃって」

3人、顔をあげる。

綾乃「みなさん。ありがとうございます。今

日は。えーと、とりあえず、お顔、拝見し
てもよろしいでしょうか」

3人、帽子をとる。全員、安と同じ太

田母斑がある女性。

ひとりは中年。二人目は安よりも少し年上。

3人目は飯山美月（13）

○同（夜）

撮影中。

綾乃がカメラを回しながら、場を盛り上げている。

3人、それまでが嘘のように笑う。

安も一緒になって笑っている。

○同・エレベーターの中（夜）

綾乃、エレベーターホールで頭を下げ、

綾乃「ほんとに、今日はありがとうございます
した」

3人「ありがとうございます」

安が、美月を含めた3人と一緒に乗りこみ、ドアが閉まる。

安「ほんとに、今日はありがとうございます

た。私、自分と同じ人に会ったことがなかったから、嬉しかったです」

安、撮影中の熱気のまま言うも、しらーっとした空気が流れる。

そそくさと帽子をかぶりマスクをかけるはじめる美月以外の2人。美月も慌てて真似る。

安ひとり、アザを丸出しにしている。

安「さつきも言いましたけど、ほんと、楽しく生きましようね私たち」

誰も何も言わない。

○同・ビルの前の通り（夜）

安が先導して3人と一緒に出てくる。

安「そうだ。LINE交換しませんか？」

安、笑顔。

3人とも、何も言わない。

安「うちら、仲間じゃないですか」

中年女性「…私は、あなたとは違うから」

聞こえるか聞こえないかくらいの小さ

な声。中年女性、そのまま去っていく。
若い女性も、そして美月も追いかける
ように去っていく。

安の顔に張り付いたままの笑顔。

○同・事務所（夜）

安、部屋に戻る。

安「あ、お疲れさまでーす」

綾乃「良い感じだったね」

安「あ、はい」

綾乃「さっき、コンビニでビーフジャーキー

買ってきたんだけど、食う？」

安「はい」

綾乃「あ、でもダメだ。もうこんな時間だも
ん」

安「ええ。まだ8時じゃないですかあ」

綾乃「やめよう。親御さんに悪い。帰って」

安「ぶーっ」

綾乃「あとは任せろ」

安「編集、一緒にやりたい」

綾乃「学校あるっしょ」

安「明日、土曜」

綾乃「あ、そっか。やべ、曜日感覚なくなってる」

安「一緒にやって良い感じ？」

綾乃「だーめ。帰れ」

安「チエツ」

安、ぶーたれたまま出ていこうとする。

綾乃「あ、タクシー呼ぼうか。駅まで」

安「いいです。事務所貧乏だから」

綾乃「おいおい。それくらいするっての」

安「若いんで走って帰りまーす」

綾乃「あ、言ったな」

安「お疲れ様でしたあ」

綾乃「お疲れ。あ、安。ちよい待ち」

安「なんですか？」

綾乃「アンタが、希望の光になるんだよ。みなさんの」

安「はい」

綾乃「そう。ネガティブをポジティブに変え

る。それはアンタにしかできないこと。で
しょ？」

安「うん：はい。お疲れ様でした」

綾乃「うん。お疲れえ」

安、部屋を出ていく。

○同・エレベーターの中（夜）

安の顔に笑顔はない。

○同・ビルの前の通り（夜）

美月が立っている。うろうろ。

安「あ」

美月「あ」

安「どうしたの？忘れ物」

美月「あ、あの：LINE。さっきの？ダメ

ですか？」

安、笑顔になり、

安「うん。しよう。交換」

安と美月、スマホを取り出す。

○安の自宅・ダイニングルーム（夜）

パジャマ姿の好子と耕一。

耕一はタブレットを見ている。

好子「遅い。何時だと思ってるの」

耕一「仕事してるんだ。当然だろ」

好子「あなたはいつも仕事仕事って、遠回しに仕事したことがない私をバカにしてるのわかってるんですからねッ」

耕一「…」

好子「主婦だって仕事なんですからね。こっちには365日休みがないんです」

耕一、うんざりした顔。

○地元の駅前通り（夜）

安、髪を下ろして帽子をかぶり歩いている。

後ろから若い男が近づいてきて、スマホで隠し撮り。

○安の自宅・ダイニングルーム（夜）

好子「みんなで、私のことバカにして」

耕一、タブレットを観て驚いた顔。

○耕一のタブレット画面（夜）

2チャンネルの安をデイスる掲示板。

男Aの声「青空の安はっけーん」

2つ前のシーンの安の写真が掲載される。

男Bの声「なんだよコイツ。普段は陰キャじゃん」

男Cの声「さすがに無理じゃね。あんなモン顔面にくっついてんだから」

女Aの声「すでに女じゃないっしょ」

○安の自宅・ダイニングルーム（夜）

耕一、タブレットを見ている。

好子「あなた、聞いているの。あなた」

好子、耕一の肩をバシバシ叩く。

耕一、タブレットを見ていて反応しない。

玄関ドアの開く音。

好子「あ、帰ってきた。安、今、何時だと思
ってるの」

安が階段を駆け上がる音。

好子「ただいまくらい言いなさい。ただいま
くらい」

好子、安を追いかけて出ていく。

耕一、タブレットを見ている。

○同・安の部屋（夜）

安、学習机に座り、スマホでLINE
通話。

画面に映る泣いている同級生の女子。

安、慰めている。

○同（朝）

安、机の上に突っ伏して寝ている。

スマホの通知で目を覚ます。

安、眠気眼でスマホを起動。

Twitterのダイレクトメール。

安、何の気なく開く。

男の声「殺すぞ。キモいんだよ」

安、どきつとする。

小堀からLINE通話。

安、画面を見たままフリーズ。

小堀の電話に出られない。

間髪入れず小堀からLINE電話。

安、出る。

小堀、画面の向こうで可愛いパジャマを着ている。

小堀の声「安、おはよう。ぼく、すごい企画
思いついた」

安「おはよう。何？何？」

安、笑顔になる。しかし体は震えてい
る。

× × ×

小堀の声「それじゃあねえ」

安「うん。ばいばい」

小堀の声「ばいばーい」

安、電話を切る。

机の上につく伏す。足がガクガクと震えている。

またLINE通話。今度は真緑。

○安のスマホ画面（朝）

真緑、大きな欠伸をする。髪はぼさぼさ。

真緑「ああ。つまんね」

真緑、画面を見る。驚いて目を見開く。

真緑「…安、おまえ…どうした？」

○安の自宅・安の部屋（朝）

安、無理矢理笑おうと表情筋を緩めるのだが、笑顔になることを抵抗するかのようにぎこちない顔になっている。

安「え？何？」

真緑の声「オマエ、何があった」

安の目から流れる一筋の涙。

真緑の声「何があったんだ安」

安の目からとめどなく流れだす涙。

○同・ダイニングルーム（朝）

T・「週明け、月曜日」

玄関チャイムが鳴る。

食事をしている安・好子・耕一。

安は制服を着ている。

好子「誰、こんな朝早くから」

好子、出ていく。

好子「はーい。どなたあ、こんな朝早くから」

好子、玄関ドアを開けて態度豹変。

好子「あら？どうしたの真緑ちゃん」

安、驚いた顔。

好子「安、あーん。真緑ちゃん。真緑ちゃん」

○同・玄関（朝）

安、出ていくと真緑がいる。

真緑「よっ」

安「真緑」

好子「あらヤダ。私ったらこんな格好で。恥

ずかしい」

真緑「いやいやそんなことないっすよ。ザ、

日本のお母さんって感じ」

好子「もうやめてよ真緑ちゃん」

○電車の中（朝）

安と真緑、並んで座っている。

安は居心地が悪そう。

真緑、窓の外を見ながら、

真緑「あ、田んぼだ。まだ田んぼあるんだ。

この辺」

安「逆じゃん」

真緑「何が？」

安「家だよ。真緑の。余裕で学校まで歩いて

いける距離でしょ」

真緑「これから、毎朝、迎えに来ると決めた」

安「真緑」

真緑「オマエは、私が守る」

安「私は、青空の安なんだよ」

真緑「は？」

安「こんなの、青空の安じゃないよ」

真緑「何言ってるんだオマエ」

安「いつも明るくて元気で、バカ正直で、それが青空の安でしょ。みんなのイメージしてる私でしょ」

真緑「オマエ、命狙われてんだぞ。あ」

安の表情が固まる。

真緑「すまん。安、すまん」

安、うつむく。

真緑、安の顔を覗き込んで、

真緑「安。大丈夫だ。オマエのこと、絶対、守るから。大丈夫。大丈夫だから」

他の乗客が奇異な目で二人を見る。

○高校・教室

放課後のチャイムが鳴る。

安、みんなに見送られながら出ていく。

真緑も追いかけていく。

女子A「あ、真緑」

女子B「なんか、朝からすごくない真緑の密着っぷり」

女子A「何あれ。マネージャー気取り？」

○事務所

綾乃、ドアを開けると安と真緑が立っている。

綾乃「あれ？あなたは」

真緑「お話があります」

安「真緑、いいから」

綾乃「どうしたの？そんなシリアスな顔して」

安「真緑、やめて」

真緑「コイツ、殺害予告を受けたんです」

綾乃、目を見開く。

真緑「TwitterのDMで」

安「真緑。大丈夫だから私は。ほんと」

真緑「大丈夫じゃないだろ」

安「どうせ冗談だって」

真緑「冗談ってなんだよ」

綾乃「…やった」

安「え？」

綾乃「よし。今日の企画差し替えるよ。緊急企画、青空の安、殺害予告受けましたでいい」

真緑、啞然。

綾乃「安、やれるね」

綾乃、安をまっすぐ見つめる。

安、綾乃を見つめ返して、

安「はい。やります」

真緑「安。オマエ、正気かよ」

真緑、安に組み付く。

安、真緑の手を振り払い、

安「やるの」

真緑「命狙われてるんだぞ」

安「私はプロだから。逃げるわけにいかない
の」

真緑「安」

安「もう帰ってよ。真緑は邪魔」

真緑、ショックを受けた顔。

綾乃「よし。じゃあ撮影はじめよう」

真緑、ひとり取り残されドアが閉まる。

○学校・教室（朝）

安「おは。みんな」

同級生たちが心配そうに集まってくる。

女子A 「安、大丈夫なのかよ」

安 「何が？」

女子B 「殺害予告。やばいじゃん」

安 「余裕っスね」

女子A 「警察には言ったの」

安 「まさか。ださいっしょ」

女子C 「安、マジで大丈夫なの？」

安 「余裕」

女子B 「すげえ。イカれてる」

同級生たち、感嘆の声を漏らす。

真緑、遅れて入ってきてその光景を

見ている。

校内放送 「興梠安、職員室に来なさい」

女子A 「呼び出しきたあ」

安 「なんだろ」

○同・職員室（朝）

安、心配そうな教師達に笑顔で話している。

○同・職員室の前の廊下（朝）

安、しやがみ込む。

女子D「あれ先輩。どうしたんです？」

安「うげえ。腹いてえ」

女子D「ええ？意外な弱点」

安「腹は弱い」

女子D「ださっ」

安「黙れ。あー痛い痛い。あー痛い」

安、トイレに入っていく。

○同・トイレ（朝）

チャイムが鳴る。

安、手前の個室の中に入り、ドアを閉めるようとするも、手が震えてうまくロックできない。

チャイムが鳴りやむ。

安、その場にしやがみ込んでしまう。

男の声「殺すぞ」

色んな声が混じる。全員が殺すぞと言ってくる。いつしか、安の仲間達

の声まで混じる。

安、スマホを握りしめている。

安「前へ前へ。とにかく前へ」

○（回想）ステージ上

芸人時代の綾乃。

嗤われてもまっすぐ前だけを向いている。

安の声「綾乃さんみたいに。前へ前へ、前へ」

○元のトイレ（朝）

安、体を震わせながら、

安「どうしよう…どうしよう」

安のスマホが鳴る。

安「ひっ」

安、スマホを落としてしまう。

画面が上をむく。

安、壁にしがみつく。恐る恐るスマホを見る。

画面にLINE通知。美月から。

美月の声「この前はありがとうございました」

○（回想）事務所の前の通り（夜）

振り返る美月の姿。

○元のトイレ（朝）

安、震える手でスマホを取る。安、返信を打ち込む。

安の声「美月ちゃん。元気？」

美月の声「あ、返信きた」

安の声「来るよ。うちら友達だもん」

美月の声「殺害予告、大丈夫ですか？」

安、スマホを持つ手。まだ震えている。無理矢理笑顔になろうとするが、表情筋が拒むかのようにひくひくするだけ。

安の声「余裕」

美月の声「怖くないんですか？」

安の声「怖い？ぜんぜん」

美月の声「すごい」

安の声「逃げてたら、みんなの青空になれな

いじゃん」

美月の声「私はいつも逃げてばっか。みんなに自分の顔見られるのが嫌で」

安、スマホを見る。

安の声「治療したら綺麗になるよ」

美月の声「え？安さんも、治療、考えてるんですか」

安の声「私は考えてない。だって」

○同・廊下（朝）

あちこちに貼られた安のポスター。

すべてアザのついた安の笑顔。

○同・トイレ（朝）

安の声「それも含めて、みんな受け入れてくれてるから」

美月の声「私には無理」

安の声「アンチから逃げたら、追いかけてくるだけだよ。前に踏み出さなくっちゃ」

美月の声「私も、強く生まれたかったな」

安の声「強くなれるよ。今からでも」

美月の声「ほんとに？」

安の声「もちろん」

美月の声「やっぱり無理」

安の声「自分の顔を思い切り見せるようにな

ってから、私は世界が変わったよ」

美月の声「そんなことできないです」

安「うん。無理はしないで。美月ちゃんらし

くいるのがいちばん大事なんだから」

美月の声「どうして、こんな顔に生まれちゃ

ったんだろう。私」

安のスマホに小堀からLINE。

小堀の声「安。どこにいるの？もう授業はじ

まってるよ」

安の声「今、行く」

安、スマホを見る。

安の声「ごめん。これから授業。また話そう

ね」

安、トイレを出ていく。

○警察署の前（夜）

安、立っている。

綾乃、カメラを構えて撮影。

○youtubeライブ配信の画面（夜）

視聴者は700人を超えている。

コメント欄には、続々と応援コメントが。

チャンネル登録者数が5000人を突破。

安、カメラをまっすぐ見る。

安「私は、負けません。いくらキモいと言われても、殺すといわれても、私は私でありつづけます」

安、にっこりと笑う。

安「以上、青空の安でした。みんなあ、明日は晴れるみたいだよお」

安、両手を振る。

安「バイバイ」

○警察署の前（夜）

綾乃「はい。オツケー」

綾乃、カメラを下ろす。

綾乃「うん。最高。安、最高だよ」

安「ありがとうございます」

綾乃「登録者数、一気に100人増えた」

安「おお」

○電車の中（夜）

満員。

安、髪を後ろで止めて頬を出した状態。

隣にいるサラリーマンが嫌そうな顔。

電車が揺れて、サラリーマンの肩に当た
る。

男「うわ。きたね」

綾乃「どこが汚いんですか？」

男「それだよ。それ」

男、アザを指さす。

綾乃「伝染りませんから」

男「近づくなよ」

綾乃「しょうがないでしょ。混んでるんだから」

ざわざわする周囲。

安、スマホを取り出し、男を撮影。

男「何すんだよ。やめろ」

安「差別したのはそっちでしょ」

男「やめろ。やめろ」

安を力任せに押す。安、尻餅をつく。

別の男の声「おい。電車とめろ。電車」

○駅の待合室（夜）

安、スマホに向かって気炎を上げている。

○youtubeのライブ配信の画面（夜）

視聴者数、500人を超えている。

安「ということ、男は傷害罪で現行犯逮捕されました」

応援するコメントが続々。【安ちゃん大丈夫？】など心配するコメント。

安「私は大丈夫。余裕です」

Liveのコメント欄が目で追えないほど
どんどん書き込まれていく。

安「私は、一生、このアザと一緒に生きていきます。みんなの青空は、絶対に負けませんから」

○安の自宅前（朝）

真緑、待っている。

安、さっそうと出てくる。

安「あ、なんかなんかもうストーカーじゃん」
真緑「安」

安、ぐんぐん先に歩いていく。顔をまっすぐ上げて。アザを見せながら。

真緑、追いかけてようとして立ち止まる。

安、立ち止まって振り返ると、

安「真緑は、心配しすぎ」

安、歩き出す。真緑もとぼとぼと追う。

○学校の教室

安の周りにはたくさん生徒がいる。

小堀もいる。

真緑だけ、離れたところで見ている。

女子A「すごい。チャンネル登録者1万突破した」

小堀「今度、A E R Aの取材受けるんでしょ」
安「そ」

女子B「どんどん有名になってくじゃん」

真緑、スマホを見る。

○真緑のスマホ

ヤフーニュース。

安の記事。アザを隠さないで生きる勇敢な女性。殺害予告や電車内のトラブルなどに毅然と立ち向かったことが書かれている。

ヤフーニュースのコメント欄を見る。

男の声「アザを使った正義の押し売りだよな。コイツ」

女の声「同じ女だと思っない」

別の男の声「なんだよコイツ。ヒーロー気取りか？」

○高校・教室

真緑、安を見る。

安「あ、ごめん。ちよつと」

安、立ちあがり教室を出ていく。

女子C「何？彼氏」

小堀「え？」

女子D「小堀、動揺しすぎだから」

小堀「ち、ちがうよ」

女子たちが小堀の真似をする。

安、教室を出ていく。

○同・廊下

安、スマホ見ながら歩いている。

みんな安に声をかける。

女子F「あーん。ちよつと聞いてよお」

安「うん。ごめん。今、無理」

女子F「何？冷たくない」

安「また今度ね」

女子F「ちえーっ」

安、階段を上っていく。

○同・屋上

安、スマホを見ている。美月からLI

NEがきている。

安、スマホにフリック入力をはじめ。

美月の声「安さん。電車の話、聞きました。

すごい」

安の声「最近ね、いつも美月ちゃんが見てる

って思ってた行動してるんだ」

美月の声「え？私のために」

安の声「そう。美月ちゃんに、自信もって生

きてほしいから」

美月の声「…それは無理です」

安の声「無理じゃないから。闘おう。一緒に」

美月の声「安さんみたいに、自分のアザを青

空なんて言えない」

安の声「真似することなんかないよ」

美月の声「自分にとって、アザは、すごい汚いものです。邪魔だし、すごい憎い」

安の声「私もそうだった。でも綾乃さんのおかげで、芸人時代のね、向き合い方を変えたんだ」

○（回想）テレビに映る綾乃

綾乃（28）の姿。

安の声「あの人が、私の人生を変えてくれたの」

○元の屋上

安、スマホにフリック入力をしている。

安の声「美月ちゃん。見てて。私、もつとたくさんの人の青空になるから。ね」

美月の声「うん。なんか、安さんがどんどん遠くなっていく気がする」

安の声「何言ってるの」

美月の声「ほんとに懂れています」

安の声「あ、そうだ。また会おうよ」

美月の声「撮影で？もう、youtubeに出るのは嫌」

安の声「撮影じゃなくていいよ」

美月の声「ほんとに？」

安の声「うん。うちら友達じゃん」

美月の声「友達？ほんとに？」

○同・教室

チャイムが鳴る。

安の周りに生徒がいっぱい。

安「よし。じゃあ行こっか。ファミレス」

周りから歓声があがる。

安を先頭にして、生徒たちがついていく。その中に小堀の姿も。

小堀、奥隅に座る真緑を見つけて戻ってきて、

小堀「真緑もいこうよ。ファミレス」

真緑「いい」

小堀「いいの？」

真緑「ああ」

小堀「じゃあね。アレ？みんな、ちよつと待ってよお」

小堀、走っていく。

真緑、黙って窓の外を見る。

窓に映る、安を非難するコメント。

主に、アザを使って正義を振りかざすことに対する嫌悪感。

○事務所のある駅の改札（朝）

T・「週末」

美月、帽子を目深にかぶり待っている。

私服姿の安、出てくる。

美月の前に立つと、美月の帽子をあげて、

安「おはよ。美月ちゃん」

美月「あ、安さん」

安「いこ」

安、美月に手を出す。

美月、安に手を差し出すと安、美月の手をしっかりと繋ぐ。

○駅前を目抜き通り（朝）

通り過ぎる安を見る人の目。目、目。

安、まるで気にしてない感じで歩いていく。

美月、恥ずかしそうにうつむいている。

安「天気いいね。今日」

美月「…はい」

安「なんで事務所で撮影かな。外にしておっかな」

○事務所（朝）

安と美月、手をつないで入っていく。

綾乃が立っている。

安「おはようございまーす」

綾乃「おは。あれ、その子…」

安「美月ちゃん。この間、対談した」

綾乃「ああ。そうだ、美月ちゃんだ」

安「ごかいちーん」

安、美月の帽子をとる。

美月、恥ずかしそうにうつむく。

安「今日、撮影、見ていってもいいでしょ？」

綾乃「いいよ。もちろん」

美月「ごめんなさい」

安「美月ちゃん。そのすぐ謝るところ、直し

た方がいいよ」

綾乃「そう。安みたいに凶太くならないと、

こいつ、自分が悪くても謝らないんだから」

安「自分が悪かったらちゃんと謝りますう」

綾乃「そうかなあ」

美月、安と綾乃のやり取りをくすくす

笑いながら見ている。

○youtubeのライブ配信画面

サムネイル【みんなの青空 青空の安

お悩み相談】

安、気炎を吐いている。

○事務所

綾乃、カメラを回している。

美月、離れたところで見ている。時折、

くすくすと笑っている。

安の声「ちよっと、譲りなよ」

○電車の中（朝）

安、優先席の前に立っている。

真緑、安の傍に立っている。

椅子に座る若いサラリーマン風の男。

目の前に立つ老婆、安に恐縮している。

老婆「いいのよ。私は全然」

安「ダメですおばあちゃん。立ちなよ。ここ

優先席だよ」

若い男、舌打ちしながら立ちあがり、

去っていく。

安「はい。おばあちゃんどうぞ」

老婆「いいのよ。いいの」

安「どうぞ。座ってください」

老婆、恐縮しながら座る。

○学校までの通学路（朝）

安と真緑、歩いている。

真緑「安…安」

安「何？」

真緑「ちよつと、やりすぎだつて」

安「どうしてよ。間違つてるのは向こうでしよ」

真緑「だけどさ」

女子A「あーん。おは」

安「おは」

女子A「いきなり、朝から正義かよ」

安「なんか許せなくつて」

真緑、スマホを見る。

安の Twitter に、電車内でのシーンのことが書かれている。

続々とツイートといいねが付く。

女子BとC「あーん」

安、振り返り、

安「おは」

安、真緑を置いて、女子A・B・Cと一緒に歩いていく。

○安の自宅・ダイニングルーム（夜）

耕一、タブレットを見ている。

好子、耕一の袖を引っ張って、

好子「お父さん。お父さん」

耕一「なんだよ。さつきから」

好子「最近、あの子変わったと思わない？」

耕一「そりゃ変わるだろ。登録者数が増えて、

自覚が出たんだろ」

好子「何が自覚なもんですか。なんか、いつも怖い顔して。私にもつつけんどんな

だから。家にいる時くらい……」

耕一、鼻で嗤う。

好子「なんですか？その嗤い方」

好子、血色ばんで立ちあがる。

耕一、相手にしない。

好子「あの子のコミュ力が高いのは、私の遺伝なんですからね。お父さんじゃ絶対ありませんから」

耕一、うんざりした顔。

好子「ああ忙し。あの子、今日もお仕事で遅

いみたいだから。ちゃんとご飯作ってあげなくっちゃ」

好子、去っていく。

○耕一のタブレット画面（夜）

ヤフーニュースの記事。

市民ホールで開催された【見た目に悩みを持つ人達】というイベントに安が参加している。

他には、アルビノや全身型円形脱毛症、リンパ管腫の方などが登壇している。

女子高生パネリストとして、人気急上昇の youtuber として安がクローズアップされている。

安の自信に満ち溢れた笑顔の写真が並ぶ。

○安の自宅・ダイニングルーム（夜）

耕一、タブレットを見ながら笑う。

好子、戻ってきて、

好子「何を笑ってるんです。気味わるい」

耕一、笑顔をすぐひっこめる。

好子「朝から晩まで、家族の顔も見ないでそんなのばかり見て。ああヤダ、ヤダヤダヤダ」

好子、自分の食器だけでなく耕一の食器にも手を伸ばす。

耕一、目の前に好子の手が伸びて嫌な顔をする。

好子「なんですか。家族のためにやってるのに。お父さんが何もしないからやってるんです。こっちは。ああもう、癩に障る」

好子、食器をもって去っていく。

安の声「いやだよ。いや」

○事務所（夜）

安と綾乃、言い争っている。

綾乃「安。言うこときいて」

安「嫌だ。ださすぎるよ」

綾乃「今日も、殺害予告がきた。今月9件目」

安「だから何？負けないし」

綾乃「警察からも、ひとりで行動させないよ
うにって」

安「大丈夫だから。そんなのに負けたくない」

綾乃「安。お願い。アンタになんかあってか
じゃ困るのよ」

安「いや」

綾乃「アンタは女の子だよ。どんなに強くて
も」

安「逃げてるのがばれたらカッコ悪いよ」

綾乃「カッコの問題じゃないの。安」

安「私らしくいたい。青空は逃げないでし
よ。どんなことがあっても。絶対」

綾乃「安」

○事務所の外（夜）

一台の黒塗りの車が待っている。

○車の中（夜）

後部座席に座る安。

安、スマホで美月とLINE。

安の声「で、今、こんな感じ。ダサダサの安だよ」

美月の声「そんなことないですよ。あ、そういえば登録者、さつき2万人超えてた」

安の声「マジ？すごいじゃん」

美月の声「なんか、女子高生社会活動家ってヤフーニュースに書いてありました」

安の声「え？誰のこと」

美月の声「安さん」

安の声「何それ。イミフ」

美月の声「とにかくすごいです」

安の声「私は、私らしく生きるだけ。でも、ださいなあ」

美月の声「ださいくないですよ」

○安の自宅前（朝）

真緑、待っている。

一台の黒塗りの車がくる。

安、出てきて、車を見て溜息。

安、真緑の方を見ないで後部座席に
乗り込む。

車、発進するも、すぐ停まる。

安、後部座席から顔出して、

安「真緑。いるならいるって言ってよ」

○車の中（朝）

安と真緑、後部座席に並んで座ってい
る。

安「ダサダサだよ。マジで」

真緑「安」

安「みんなに、何て言おう」

真緑、安を見る。

安「なんか、全部言い訳みたいでダサい。安
っぽくないってみんなが思ったらどうしよ
う」

真緑「安」

安「真緑も考えてよ」

真緑「いつでも、みんなオマエの味方だよ」

安、醒めた目で真緑を見る。そして溜

息。

安「良い。自分で考えるから」

○高校・正門（朝）

安、後部座席から下りていく。

安に気づき、集まってくる生徒たち。

安「やあやあ庶民のみなさん。おはよう」

女子A「やべ。VIPじゃん。安」

安「そうそう。VIPになりました」

安の周りに人の輪ができ、笑いが起こる。

○同・教室

正門の外にパトカー。

真緑、窓の外を見ている。

女子A「なんか、怪しい男がうろついてたら
しいよ」

女子B「え？ターゲットは安」

女子A「それ以外ないっしょ」

小堀、教室内に駆け込んできて、真緑

の前へ。

小堀「真緑。安は？」

真緑「知らない」

小堀「知らないじゃないよ。ちゃんと捕まえ
とかないと。あ、安」

安、入ってくる。

安「どうしたの？」

小堀「安、警察きてるよ」

安「警察？なんで」

小堀「怪しい男がいたんだって」

安の周りに、心配そうに集まってくる

同級生達。

安「それ、こぼりんのこと？」

小堀「：ち、ちがうよ」

安と同級生たち、笑いだす。

小堀はふんふんしている。

○同

チャイムが鳴る。

正門の外に停まる黒塗りの車。

安「ああ。ヤダなあ」

女子A「VIP対応じゃん」

安「ださいじゃん」

女子B「いいなあ。うちらも乗せてよ」

安「ダメえ」

女子A「なんか、最近意地悪じゃない」

安「そろそろ撮影いこ」

小堀「見送るよ」

安「え？いいから」

女子たち「行こう行こう」

安を先頭にして、教室を出ていく生徒たち。

真緑、ぼんやりと見ている。

○同

真緑、窓の外を見ていると、校庭を安を先頭に歩いている集団が見える。

正門に現れる美月。安たちと違う制服を着ていて、小柄なので一層目立つ。

美月は頬を隠すような髪型をしている。

真緑、ぼんやりと見ている。

安、美月を見つけて嬉しそうに近づいていく。

真緑、突然立ち上がり、教室を飛び出していく。

女子C「あれ？真緑どうした？」

○同・校庭

安「美月ちゃん。どうしたの？」

美月、うつむいたまま立っている。

小堀「安、その子、誰？」

安「私の友達だよ。美月ちゃん。私はこの子のために……」

美月、安に小走りで駆け寄り、安にくっつく。

安、驚いた顔をする。胸の中にいる美月、果物ナイフを安の腹部に突き刺している。

安「…え？え？み、美月ちゃん」

美月「だって…こうしたら、みんなが、私の

こと仲間にしてくれるって言うんだもん」

安「…」

美月「もう仲間外れにしないって言うんだもん」

○（回想）どこかの公園

美月、同じ制服を着た数人の女生徒から小突かれながら、スマホで安とLINEをしている。

○元の校庭

小堀「安？」

安と美月、弾かれたように離れる。

美月、尻餅をついて座る。

安の腹部に刺さったままのナイフ。そこからドクドクと血が流れていく。

女子たちの悲鳴、逃げていく生徒たち。

安、ひとり立っている。

小堀、少し離れたところに立っている。

○同・下駄箱

真緑、悲鳴をあげて逃げ惑う生徒たちとすれ違う。

真緑、ぶつかりながらも飛び出していく。

校庭に安と、少し離れたところに小堀が立っている。

真緑、飛び出していく。

○同・校庭

安、自分の血を指で触れる。

安「…あああああ」

小堀「あ…安」

安の悲鳴が校庭に響く。

安、そのまましゃがみ込む。

真緑、滑り込むようにして安を抱き寄せる。

真緑「安。大丈夫か？」

安の腹部からどぼどぼと血が噴き出る。

安「真緑い。いたいよお。いたいよお」

真緑「大丈夫だ。大丈夫」

安「みどりの。嫌だよ、死にたくないよ」

真緑「死ぬかバカ。（周囲を見て）おい、誰か救急車、救急車呼べ」

小堀、呆然と立ち尽くしている。

真緑「小堀。救急車だ。早くしろ」

小堀「あ、あ、うん」

小堀、慌ててスマホを取り出す。

真緑、安の手の上から、血が噴き出ている箇所をおさえている。

安「嫌だよお。死にたくないよお」

真緑「大丈夫だ。大丈夫だから」

教員室から教師たちが飛び出してくる。
遠くから救急車の音。

○病院・治療室の中（夕方）

安と並んで寝ている真緑。

真緑の制服は血まみれ。

真緑の体にはチューブがつながれていて、血を抜いている。

男性の声「安さんと同じ血液型の人。ここに並んでください」

○同・廊下（夕方）

たくさんの生徒たちが並んでいる。

○同・病室（朝）

T・「2日後」

安、目を覚ます。

好子と耕一が心配そうに覗き込んでいる。

安「母さん？」

好子「良かったあ」

好子、泣き出す。

耕一も涙ぐんでいる。

安「私、生きてる？」

好子「当たり前じゃないの。バカね。子供が

親より先に死んでいいもんですか」

安「良かった：良かったあ」

安、泣きだす。

好子「アンタ、真緑ちゃんに一生、頭あがらないわよ」

安、好子を見る。

好子「真緑ちゃんが頑張ってくれなかったら、アンタ、今頃死んでたから」

安「真緑は？」

好子「学校よ。アンタなんかのためにずっと一緒にいるのは親くらいなもんですよ。お父さんもずっと、仕事休んでくれて」

安「父さん」

耕一、照れて顔をそむける。

安「ありがとう。ほんとに、ありがとう」

安、天井を見上げる。

○同

真緑や小堀、同級生達が入ってくる。

ベッドで寝ている安と泣きながら抱き合う。

○同・屋上

耕一、煙草を吸っている。

空を見上げる。まもなく夕焼けがはじまろうとしている。

安の声「退院して、私は youtuber を辞めた。
綾乃さんもわかってくれた」

○安の自宅・安の部屋

T・「一週間後の土曜日」

安、スマホを見ている。

Twitter の DM。

安の声「それでも、未だに殺害予告は来る。
何故なんだろう？」

安、窓に映る自分の顔を見る。

安の声「アザがあるのに、目立とうとしたから？」

○街中

安、髪を下ろし帽子をかぶって歩いている。

安、洋服屋のショーウィンドウの前で

立ち止まり、ショーウィンドウに映る自分の顔を見る。

安の声「美月ちゃんは、まだ13歳だったから、刑事事件にはならなかった。母は、民事で賠償をと怒っていたけど、私がそれを望まなかった」

安、自然と自分の腹に触れている。

安の声「あの子の気持ち、わかるから。あの子は私だ。ほんとうの私」

女性の声「どうぞ。お入りになって」

安、顔をあげると、店員の中年女性が笑顔で見ている。

安「いえ。私は」

女性「どうして。すぐくスタイルが良いから、きつとうちの洋服似合うと思うわ」

安、帽子をとって髪を掻き上げてアザを見せると、

安「こんなの、顔についてるんで」

女性「そんなの関係ないわよ」

女性、安を毅然とした目で見る。

女性「あ、ごめんなさい。なんか失礼なことを言っちゃったかしら」

安「いえいえ」

女性「よかったら入っていらして。ね」

女性店員、店の中に戻っていく。

安、アザのある自分の顔を見る。そして初めて笑顔を浮かべる。

安、髪の毛を後ろで縛り、歩き出す。

安の声「なんか、よくわからないけど嬉しかった」

すれ違いざま、安のアザを見ている若い男がいる。

路肩にいるカップルが指さしたりしている。

安の声「やっぱり傷つくよ。やっぱり怖いよ。でも、ほんとに怖くなったなら隠せばいいし、ほんとに嫌になったら治療すればいいんだ」

安、まっすぐ前を向いて歩いていく。

安の声「何か、一個に決めなきやいけないわけじゃないんだ」

小堀の声「あーん」

信号の向こうに立つ小堀と真緑。

安、大きく手を振る。

小堀と真緑も降り返す。

その時、安のスマホがバイブレーション。見るとLINEの通知。同級生。

女子Aの声「あーん。助けてえ。マジやばい」

安の声「でも、一つだけ決めたことがある」

信号が赤から青に変わる。

安、空を見上げる。

安の声「もう、みんなを照らすために、無理したりはしないって決めたんだ」

安、スマホをポケットに入れて歩き出す。

○空

抜けるような青い空。

安の声「それでも、私は青空をやめない。本当に大切な人の青空でいたい、そう思ってる」

真緑の声「いやあ、コイツがさあ」

小堀の声「真緑。言わないって約束しただろ」

安の声「何？何？」

3人の楽しそうな声がひびく。